



22年間の足跡 ～これまでの活動から～

変わらぬ想い-----	31 ページ
埼玉県教育委員会委嘱 「学校と民間の共同プラン開発事業」-----	32 ページ
日本福祉教育・ボランティア学習学会 第27回「埼玉大会」-----	33 ページ
活動を伝えるパネル-----	34 ページ
まなびばしゃべりばカフェ・研修会ちらし-----	35 ページ

変わらぬ想い～パワーポイント資料より

埼玉県あるいは県外からあったかウェルねっとへ講師依頼をいただくことがあります。
 目的や趣旨に合わせて、数人のチームで伺うことが多いのですが、時には単独で伺うこともあります。
 内容は様々であっても講演で使用するパワーポイントにいつも入っているスライドをご紹介します。
 これからも豊かな福祉観とともに「ふだんのくらしのしあわせ」を大切に！

あったかウェルねっと

あったかウェルねっとの「ウェル(WELL)」
 は、Welfare(福祉)、
 Well—Being(幸福)の
 Well(大切にという意味)です。

私たちのネット愛称には、
「温かな心で一人ひとりを大切に思うつながり」
 でありたい、との願いが込められています。

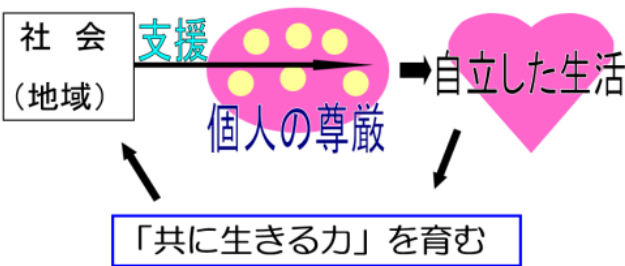
2000年
 大改革！国政から地方自治へ

「超少子高齢社会」の到来！

「共に生きる力」を育む
 福祉教育・ボランティア学習の推進

みんなで暮らしやすいまちを創る！

ボランティアってどんなこと
 なんだろう？



福祉って何だろう？

ふだんの **く**らしの **し**あわせ
 ～自分のしあわせ みんなのしあわせ～

「共に生きる社会」の具現化

地域には...



時代が変わっても、変わらない！

- 様々な立場の人たちが出会い「協力」し合う。
- 「福祉」をふだんのくらしのしあわせと「広く」捉える。
- 地域の人たちと「豊かな福祉観」を育て合う。
- 一人ひとりの「尊厳」を大切にしながら支え合う。
- 誰もが地域で「自分らしく生きる力」を培っていく。
- 地域の特性を生かした「地域の福祉力」「地域福祉」を高めていく。
- 誰もが暮らしやすい福祉のまちづくりに向けて、柔軟に、ゆるやかに「連携」していく。

埼玉県学民共同プラン開発事業

埼玉県教育委員会「学校と民間の共同プラン開発事業」

深谷市立南中学校&あったかウェルねっと ジョイントプロジェクト

深谷市立南中学校中学1年生(176名)~福祉・ボランティア教育~

目標:あたたかくふれあう力(集団適応力)を育む主体的な学習

《2005年の流れ》

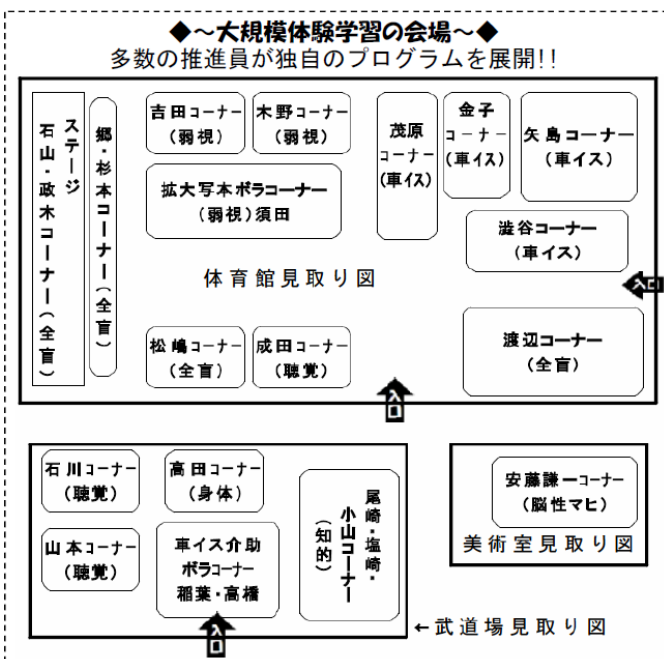
- 第1回(9/15):福祉って? ボランティアって?
- 第2回(9/29):本物に学ぶ!! Part1
- 第3回(10/6):本物に学ぶ!! Part2
- 第4・5回(10/20):大規模体験学習
- 第6回(10/27):未来に向け学ぶ!! Part1
- 第7回(11/10):未来に向け学ぶ!! Part2
- 第8回(11/22):未来に向け学ぶ!! Part3
- 第9・10回(11/24):未来に向け学ぶ!! Part4
- 第11・12回(12/1):未来に向け学ぶ!! Part5
- 第13・14回(12/8):深谷南中、未来の社会人
“共に生きる社会の一員として、今自分たちにできること”
- 第15回(12/13):全校生徒に向けて提言発表

《学習方法》

①導入 全体・個人 → ②体験学習 グループ → ③課題設定・課題追求 グループ・全体 → ④結 提言 全校へ

学民協働プロジェクトは2005年に引き続き、深谷市立南中学校1年生の総合的な学習の時間で協働実践した。

2006年については、深谷市社会福祉協議会の皆さんや地域の方の力添えもあり、9月28日第1回「福祉・ボランティアの総論」を皮切りに協働プログラムが進んだ。



日本福祉教育・ボランティア学習学会 第27回「埼玉大会」

2021年の第27回大会は、2007年第12回埼玉大会から15年を経て、再度「埼玉大会」として開催した。2020年は世界中を巻き込んだコロナ禍となり、日本でも様々な福祉課題がより一層「多様化・複雑化」した。そこで、2021年の「第27回埼玉大会」では、これまでの埼玉20年の歩みと繋がりを力に、誰もが、自分の「しあわせ」を実現していけるよう、「埼玉県社会福祉協議会・市町村社会福祉協議会」「あったかウェルねっと」「若者への福祉教育研究会」「埼玉県福祉でまちづくり研究会」等々が連携し、「チーム埼玉」が一丸となって、厳しいコロナ感染状況を常に気にしながら「オンライン会議」を重ね、企画・準備した。

まず、埼玉大会本番に向け、プレ企画プログラムを開催し、学会員や地域に参加を呼びかけ、埼玉から発信するプログラムの基を作り、以下のように大会を迎えた。

大会テーマ

「多様な市民が創る、ふくし・共生の文化」～お互いにエンパワメントしあう福祉教育・ボランティア学習の可能性～

基調報告 「埼玉県の福祉教育・ボランティア学習の経緯と特色について」 *報告者：佐藤陽氏

シンポジウム 「ふくし・共生の文化を創成する」～多様な立場の市民が主体的に学習と実践を紡いで～

多様な立場の市民が、お互いの異質性や多様性を認めあい、自分らしく生き、一人ひとりが「ふだんのくらしのしあわせ」と、共生を実現できる地域をつくるには、どんな学びが大切か？ プラットフォームをどう作っていけばよいか？ ふくし・共生の文化を作り出す、福祉教育・ボランティア学習の可能性を考えた。

《コーディネーター：横田八枝子、コメンテーター：原田正樹氏》

*報告者：坂本晃一、熊倉悠貴、古賀和美、木野ゆずき（推進員）

実践報告① 社協+地域+学校…「人材育成の効果とネットワーク継続の秘訣」

② 地域+学校…高校生の地域福祉活動での学習機会から「生徒に任せることでつながる学び」

③ 社協+地域…社協での継続研修が地域福祉活動に発展した「子ども支援と福祉教育」実践

④ 社会+地域…当事者ネットワークでの当事者の自立・社会参加、ボランティアとの協同実践等

特別課題別研究① 「埼玉発！コロナ禍における社会福祉施設での福祉教育の展開」

《コーディネーター：牧野郁子、コメンテーター：菱沼幹男氏》

実践報告 a) 社会福祉施設特養みどりの風×学校

b) 深谷市社協×社会福祉施設特養ひびき

c) 社会福祉施設やどかりの里×学校

特別課題別研究② 「埼玉発！多様性を受け入れる地域づくりのために～すべての社協活動の基礎のある福祉教育・ボランティア学習の機能を問う～」 《助言者：佐藤陽氏、諏訪徹氏、中島 修氏》

報告イ) 埼玉県社協は、社協を軸とした福祉教育を推進する学び合いのプラットフォーム創設について

ロ) 4市町村社協（東松山市・嵐山町・吉川町・滑川町）が当事者やボランティアと共に運営する「ふくふく木曜会」での、協同実践と定例会によるプログラムの深化と効果について

ハ) 所沢市社協は、企画運営に CSW が必ず関わることで、地域課題を視点に入れた授業展開や様々な社会資源や人々とのつながりによる効果について

ニ) 鶴ヶ島市社協は、様々な部署が福祉教育を意識し、地域づくりを進めることの意義について

本大会プログラムは、埼玉企画・学会企画と沢山あったが、参加者と一緒に「テーマ」について、それぞれのプログラムを紐解き、「共に生きる力を育む」福祉教育推進に向けて、学び・実践が循環できるよう深め合い、新しい「カタチ」の With コロナ地域共生社会の構築に向けた研究につなげた。

活動を伝えるパネル

2015(平成27)年度「埼玉・教育ふれあい賞」受賞時の展示パネルより



共に生きる力を育む福祉教育の推進

いだんの
くらしの
しあわせ

彩の国福祉教育・ボランティア学習推進員ネットワーク あったかウェルねっど

誰もが住みよい社会づくりには、福祉制度の充実とともに、住民一人ひとりの優しさで支えあいが必要です。子どもから高齢者まで住民全体に“福祉の心”を感じてもらおう学びが「福祉教育」です。

福祉の種まき

あったかウェルねっどの「ウェル(Well)」は、Welfare(福祉)、Well-Being(幸福)のWell(大切にという意味)です。私たちのネット愛称には、「温かな心で一人ひとりを大切に思うつながり」でありたいとの願いが込められています。

県域で出会って学ぶ場づくり!



福祉交流
セミナー



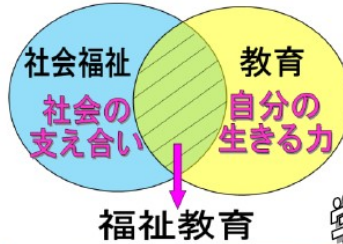
工夫
あらしの
これの



誰もが楽しめる
音声ガイド付き映画を体験



豊かに学ぶ力「福祉教育から福祉共育」へ



一人一人違う環境の中で生きていることを理解し、互いに支え合う仲間づくり・地域づくりへ!

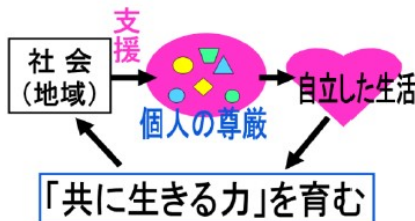
地域福祉



まなび場しゃべり場
カフェ



誰もが誰かの力になれる地域づくり



学校で

共に生きる社会の一員として
今、自分たちができること!



ノーマライゼーション
社会の具現化

「あったかウェルねっど」とは

あったかウェルねっどは、平成13年に設立され、子どもへの福祉教育をはじめ、地域で福祉教育を教える教師・社会福祉協議会職員、ボランティアなどに対する研修の講師も務めるなど、幅広い活動をしています。

ねっど会員は、埼玉県社会福祉協議会主催の養成研修を修了し、認定を受けた「埼玉県福祉教育・ボランティア学習推進員」の中の有志と賛助会員で約150人。分野は、教師、社会福祉協議会職員、ボランティア、障害を持った人など様々で、職業・立場・地域を超え、“福祉の心”の育成のために埼玉県域でボランティアに活動しています。

まなびばしゃべりばカフェ・研修会ちらし

これまでのチラシから



まなびばしゃべりば カフェ2018 スペシャル

結婚観を探ろう！ 知ろう！

地域のおあたいたかいつながらい、
相手を大切に思うつながらい、
人生いろいろ、子どもから大人まで
今この、自分の
結婚観を探ろう！知ろう！

出会のチャンス
いろいろな人生体験が活きる！！

日時：平成30年11月10日（土曜）
14時00分～16時30分
場所：オルモ ギャラリー1-2・3（東武東上線北戸駅 地図は裏面）
対象者：関心のある若者たち
募集人員：先着30名（20歳以上の未婚者）
運営スタッフ：20名（年齢制限なし）
参加費：500円

人生コーナー

- 若者：恋愛、結婚、婚活
- 子ども妊婦：子育て、産後、産前
- 夢を語る：夢、希望、未来
- 人生を語る：人生、経験、教訓

申込み・問合せ あったかウェルねっと事務局（須田）
080-6122-4496（TEL） 049-283-1865（FAX）
メールアドレス masako@nicoino39.net

あったか福祉交流セミナー2016

18歳とふくし

～未来への種まき 若者力を育てよう～

手話通訳・要約筆記あり

対象：福祉に関心のある人
参加費：一般1000円
学生500円
(軽食、資料代を含みます。)

日時：平成28年5月8日（日）11:00～15:50 受付10:30から
場所：彩の国すこやかプラザ 2F セミナーホール（地図は裏面にあります）
内容：講演・ワークショップ・情報交換・ブース・展示コーナー

11時～11時30分 開会・あいさつ
11時30分～12時 参加者ブース紹介（アピールタイム）
12時～13時 昼食・交流（ブース訪問）
13時～14時 講演「18歳とふくし」 原田正樹氏
14時～15時45分 グループワーク
15時50分 閉会

13:00～14:00 講演「18歳とふくし」
講師：原田正樹氏 日本福祉大学 教授

地域と若者
若者とボランティア
地域福祉と福祉教育
県内各地の取り組み
情報がいっぱい！是非！ご参加！

あったかウェルねっと設立より
ご助言ご指導くださった原田正樹先生の
講演です。社会福祉問題を解決する実践力
を持って「自立と共生の福祉社会」「福祉
のまち」「ノーマライゼーションの具現化」
を目指していけるよう学びましょう。

申込先
ねっと事務局 須田 (FAX)049-283-1865
メールアドレス masako@nicoino39.net
埼玉県社会福祉協議会 平田
(TEL)048-822-1435
(FAX)048-822-3078
メールアドレス vc@fukushi-saitama.or.jp

2019年度 ねっと研修会

地域をつなぐ福祉教育

～地域いろいろ、人生いろいろ～

日時：2019年5月12日（日曜）10時50分～15時45分（受付10時20分～）
会場：彩の国すこやかプラザ2階セミナーホール
講師：原田正樹氏（日本福祉大学・教授）
島村八重子氏（全国マイケアプラン・ネットワーク代表）

対象：地域福祉や福祉教育に関心のある人（学生含む）
参加費：2000円 学生 無料

(1) 対話「自分を知る・地域を知る・共に生きる」
登壇者：原田正樹氏、島村八重子氏
全国マイケアプラン・ネットワーク代表として2001年から活動している島村八重子氏は、親の介護・子育て・里親も体験、原田正樹氏との対話から「身近な社会で共に生きる」誰もが自分らしく生きる」ためのヒントを学びます。

(2) 昼食タイム～交流・情報交換～
登壇者：原田正樹氏、島村八重子氏
分科会A～地域いろいろ、人生いろいろ～
分科会B～性・Dのうら2つを選択
(3) 分科会A「ひきこもり」
発達障害とひきこもり
体験者のお話から一緒に
考えよう！
話者提供者
若山 浩二氏
(中高年発達障害当事者)

(4) 分科会B「LGBTQ」
性的マイノリティーへの
理解・多様な価値観をへ
生きるを大切に！
話者提供者
若山 浩二氏 (トランスジ
ンダー当事者)

(5) 分科会C「いのちの授業」
小さくあたたかいのち
に贈る、いのちを感じる。
生きるを大切に！
話者提供者
木暮倫子氏 (代表)・太郎
田原聖子氏・島村八重子氏
(Baby's life)

(6) 分科会D「未来の身」
主体的に「輝きやがに」
多世代つながる！
話者提供者
平山雄次氏 (コミュニティ
ス・北戸北戸まわわか)

(7) アドバイザー
若山 浩二氏
(発達障害当事者)

(8) アドバイザー
若山 浩二氏
(発達障害当事者)

申込み方法
◎氏名・連絡先・市町村・所属をお知らせください。
◎分科会の第1希望から第3希望までを記入してください。(〇印で囲んでください)
人数調整については事務局に一任とさせていただきます。
◎申込み締切り 4月25日(木) ◎保育・手話等の配慮が必要な方は申し出てください。

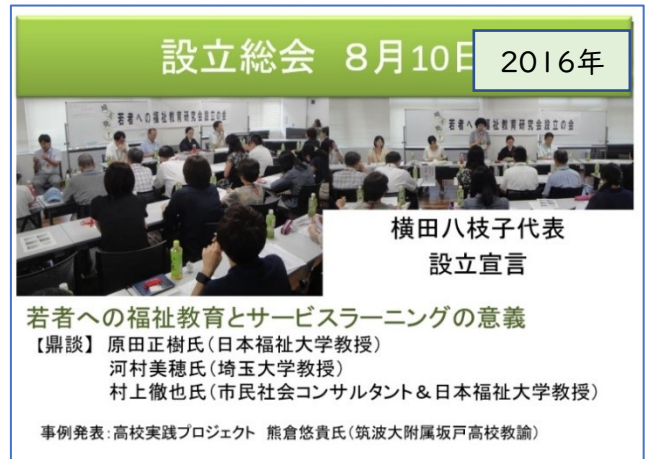
氏名	連絡先 TEL・メール	市町村・所属など
分科会 第1希望	A B C D	必要な配慮(あれば)
分科会 第2希望	A B C D	
分科会 第3希望	A B C D	

若者への福祉教育研究会発足 ～ふくしの学びを若者と共に～

◆若者への福祉教育研究会（若福研）の誕生

あったかウエルねっと（以下、「ねっと」）の設立から、11年が経過した頃に学校教育で総合的な学習の時間が縮小されこのことにより新たな推進員を養成しないようになり、10数年、実践を重ねても、車いす体験などの疑似体験にとどまる福祉教育の状況に限界を感じ、なんとか打開したいという気運がありました。

空前の少子高齢化、2025年問題、18歳選挙権問題、子ども若者が起こす事件等、地域社会で多様な福祉課題が出ており、次世代の担い手となる子どもや若者の年代を含め、住民自身がより主体的に生きていくことが求められていました。そこで2016（平成28）年、あったかウエルねっとの横田代表の呼びかけにより若者への福祉教育研究会（以下、若福研）が新たに設立されました。若福研は、「ねっと」で培われたネットワークにより県内から数多くの福祉教育の実践事例を集め、研究者も参画する組織となりました。「ねっと」の活動や研修でのつながりを活かし、推進員の皆さんがそれぞれの地域で実践している福祉教育プログラムを見える化し、さらなる福祉教育のプラットフォームを広げるために、設立されました。



若者への福祉教育研究会呼びかけ文

あったかウエルねっと15周年のテーマとして「**わかもの**」を取り上げ、若者が「**ともに生きる力**」を育み、社会福祉意識を創り出す「**サービスマーケティングプログラム**」の創出・実践を行い、広くそのプログラムを発信・普及するために、ネットワーク内のプロジェクトとして本研究会を立ち上げることとなりました。

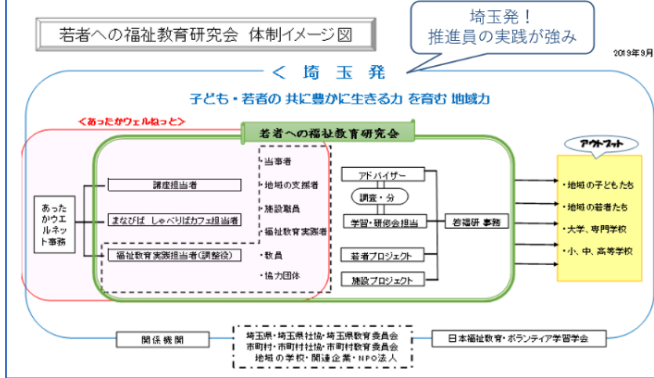
このプロジェクトの実践と研究を通して、埼玉そして日本に住む若者が、ともに生きる力を身につけ、安易な自立観ではなく、相互実現的自立の視点を持ち、社会の一員として自分らしく歩んでいけるような福祉教育を創造していきたいと...

草の根からの福祉教育実践とは・・・

学校や社協だけが先導的に行うのではなく、**当事者、当事者家族、地域のボランティア・支援者、福祉関係施設職員等様々な組織や個人から、主体的に発信する福祉教育。**

活動から
見えた

福祉教育・ボランティア学習推進員 + 研究者 + 実践者 + 当事者 + 専門職



研究の目標と《効果》

- ① 埼玉方式で若者の共生力を育む
《実践プログラムの創出・普及》
- ② 地域で若者の社会福祉意識を創り出す
《相互実現的自立》
- ③ 福祉教育推進員や地域活動者・教育関係者・行政関係者・企業などがチームを組んでの協働実践で新しい仕組みづくり
《新しいつながり》

現在行っている福祉教育実践を**見える化**を！

◆ プロジェクト活動とプラットフォーム

若福研は、様々な福祉教育にかかわる推進員、障害のある当事者等個人、施設、学校等とつながりながら、以下のプロジェクトを実施してきました。

- ① 県内で若者が主体的に活動する実践を発信するプロジェクト
- ② 福祉施設が主体となった実践プログラムをブラッシュアップするプロジェクト
- ③ プログラム集のブラッシュアップ版を作成するプロジェクト
- ④ 施設プロジェクト
- ⑤ 若者プロジェクト

《実績》

- 福祉教育実践研究会 27回開催（うち施設プロジェクト 15回開催）
- 若者プロジェクト2019年4月7日から
5回プロジェクト+団体紹介掲示物展示+合同活動（被災地支援）
プロジェクト報告書作成後→オンライン交流会（2021年3月5日）
7団体へのヒアリング 2021年4月16日～7月1日
- 施設プロジェクト16回開催（オンライン4回含む）
- 設立総会1+アドバイザー会議2+学習会5+わかもの企画1+学会プレ企画1+共同企画実施
- 社会福祉施設での若者への福祉教育に関するアンケート 2018年8月～ 386法人 回答113法人178件

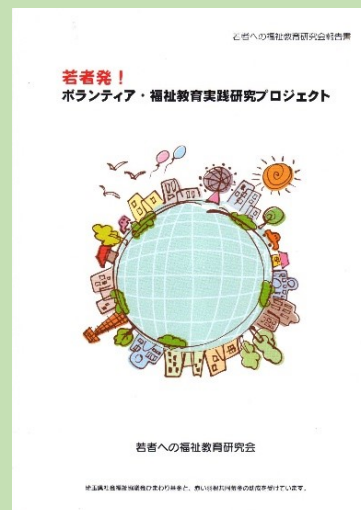
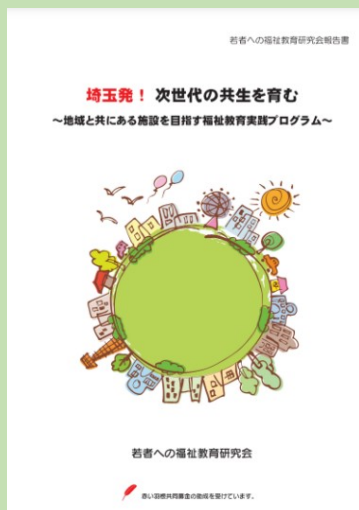
若福研は、当初2年間限定の活動予定でしたが、現在もプロジェクトで積極的な活動は行わないものの、「ねっと」と連携連動しながら、組織は継続しています。また、若者が主体的に活動することに関して支援を行っています。例えば、2019年の台風19号被害では川越市のボランティア参加、2023年には、東日本大震災被災地から学ぶスタディツアーでの学生の学びを支援しました。今後も、若者が主体的に学び、活動につながる活動を支援していく予定です。

これらの組みを通じ、新たなネットワークを広げ、広義の福祉教育への理解が広がり、それぞれの実践がブラッシュアップされていると感じています。



東日本大震災の語り部さんから現地で話を聞く

若福研でまとめた報告書



*「社会福祉施設での若者への福祉教育に関するアンケート調査報告書」もダウンロードできます

若者への福祉教育研究会（略称 若福研）

昨今の社会では、生活課題・福祉課題は多様化、複雑化しています。中でも「子ども・若者」を取り巻く社会は「子どもの貧困」「18歳選挙権」「若者の自殺」等が問題になっています。

そこで若福研では、あったかウエルねっと 15周年のテーマでもある「わかもの」が主役になり「共に生きる力」を身につけ、社会の一員として自分らしく歩んでいけるような福祉教育実践を、研究者と共にサービスラーニングの視点でのプログラム化に取り組みました。これまでの研究では、プロジェクトチーム（高校、大学、地域・あったかウエルねっと、地域・ワークキャンプ、精神保健分野、施設での実践プロジェクト等）を設け、埼玉発！草の根からの実践プログラムの「見える化」とブラッシュアップを継続して取り組んでいます。新たなネットワークを構築しながら研究を重ね、地域共生社会の実現を目指します。

<実践プログラムプログラムは、『次世代の共生力を育むための福祉教育実践プログラム集 実践プログラム集』としてまとめました。奥書にてお分けしています。>

・若者への福祉教育研究会HP

<http://wakafukuken.wixsite.com/saitama>

⇒



・フェイスブックのグループページ

<https://www.facebook.com/wakafukuken>

通称: あったかウェルねっと

あったかウェルねっと 主催事業・活動

福祉教育・ボランティア学習の「場」づくり
県民対象の福祉・ボランティア研修会の開催
推進員対象の学習会の開催
県内外へ研修講師の派遣
ホームページ・会報等の情報提供

若者への福祉教育 研究会と共同

研究会の開催
福祉教育実践プログラム開発
及び報告書の作成
Facebook/HP より情報発信

埼玉県社会福祉 協議会と連携

運営委員会の協同開催
推進員フォローアップ研修
ねっと会報へ情報提供

連携

教育委員会(学校)
市町村社協
行政 関連団体

あったかウェルねっとは、平成 13 年に設立され、子どもへの福祉教育をはじめ、地域で福祉教育を教える教師・社会福祉協議会職員、ボランティアなどに対する研修の講師も務めるなど、幅広い活動をしています。

ねっと会員は、埼玉県社会福祉協議会主催の養成研修または規定研修を修了し、認定を受けた「埼玉県福祉教育・ボランティア学習推進員」の中の有志と賛助会員で約 100 人。分野は、教師、社会福祉協議会職員、ボランティア、障害を持った人など様々で、職業・立場・地域を超え、“福祉の心”の育成のために埼玉県域でボランティアに活動しています。

巻末によせて

あったかウェルねっと継続の秘訣

相談役 坂本晃一（墨田区立菊川小学校 主任教諭）

私のウェルねっととの関わりは、教員へ転職するきっかけとなった、前職（埼玉県社協・福祉教育担当）に遡る。そして、転職をきっかけに埼玉を離れ現在の東京都に移っても、ウェルねっとの仲間とのつながりは途絶えることがなかった。福祉教育、いや、自分の人生を豊かなものにするパワーや人とのつながりを求めて22年間もの年月離れることがなかったのだと思う。

今回、記念誌という光栄な場をお借りして、ウェルねっと草創期から携わらせていただいた立場（県社協担当として、ボランティアな推進員として）から、ねっとの長期継続の秘訣を考えてみたい。

人材育成の効果・ウェルねっと継続の秘訣①



【1 基盤づくり（県社協担当として）】

① 県社協補助金システムの見直し

② 研修修了者（推進員）の活動の場づくり

⇒ あったかウェルネット誕生・キーパーソンの発掘

⇒ 地域を超えた多様な立場の推進員の面白さ

1. 基盤づくり（県社協担当として）

22年ものねっと継続の秘訣で欠かせないのは、福祉教育を推進する地域の応援団（人材）を育てつなげる視点あり、人材育成を担う市町村社協の役割が重要であった。その意味で、応援団（福祉教育推進員）を研修で養成し、研修修了者を地域でどのように活躍してもらうかが草創期の鍵となってきた。

(1) 埼玉県社協補助金システムの見直し

1999までの県社協福祉教育研究会（原田委員長）では、福祉教育を支える人材育成（研修システムの構築）が提言され、それを実現する形で、私が福祉教育担当となった2000年に「埼玉県福祉教育・ボランティア学習推進員養成研修」を開始した。ただし、不特定多数への一般啓発セミナーでは地域に人材が定着しない課題があり、市町村社協のバックアップをシステムに組み込む必要があった。

当時、福祉教育への支援策としては、県社協⇒市町村社協⇒学校への「福祉協力校・ボランティア推進校補助金制度」が主流であり、学校の成果が見えづらく「金のバラマキ」との批判が高まっていた。そのため、埼玉県社協では全国に先駆けて、協力校補助金を見直し人材育成をする市町村社協へ補助する「ボランティア体験学習事業」にリニューアルさせた。

ボランティア体験学習事業の柱として「福祉教育人材育成のための『研修二段階実施』」を創設した。つまり①市町村社協が推薦する地域人材が「県社協推進員養成研修」を受講し推進員となる。②修了後、市町村社協が「地域福祉教育研修」を実施し、地元の推進員が協同して企画・講師をつとめる、というものであった。これにより、県レベルでの学びを推進員を介して市町村レベルに広く普及させることが可能となった。

(2) 研修修了者(福祉教育推進員)の活動の場づくり

よくある研修の課題として、修了者は認定したものの、その後の具体的な活動の場が不明確で、先ずぼみしてしまうことが多々ある。これを避けるため、推進員のデビュー戦として「地域福祉教育研修」を補助事業の中に位置づけ、自ら研修をプロデュースするようお願いした。講師は外部の研究者に依頼するのではなく、推進員自らが県での学びを自分なりに咀嚼し他者に伝える難しさと楽しさを体感するのである。これにより、援助者としての自らの力もさらに付き、同じ地域の立場の異なる推進員同士の協同・団結も高まり、市町村社協とのパイプも確固としたものになった。

★あったかウェルねっとの誕生・キーパーソンの発掘

県社協養成研修終了後は、推進員は前述の各地域での活動に取り組むこととなったが、せっかく県域全体に推進員が誕生しているのにつながる場(県域ネットワーク)がないことが課題となっていた。日頃地域で出会うことのない県域の推進員とのつながりは、非常に触発され地域での推進員活動にも成果が還元されるメリットがある。

そこで、当時の担当だった私から、県域ネットワークの中核(代表、世話人たち)を担ってくれる人材の発掘を修了者(推進員)の中から行うこととした。その際気を付けたことは、ボランティアや障がい当事者へお願いしたことである。業務として受講した方々(社協や教員等)は、異動や配置換えにより福祉教育から卒業してしまうリスクがあり、関わりたいという自己意欲のあるボランティアの方がネットを継続・発展していけると考えたからである。

実際、養成研修第二期の学習中に、現代表の横田さん(坂戸市ボランティア団体)が「みんなでつながれる場があるといいよね。」と言っていたのを思い出し、個別に代表をお願いすると快くお引き受けいただけました。そして、横田さんのつながりで、現事務局長の須田さん(横田さんと同じボランティア団体)へお声がけいただき、その後は、みなさんご承知のとおり、お二人を中心とした熱意とパワーが求心力となり、様々な応援団を巻き込み現在22年目のウェルネットがあるといっても過言ではないと思う。

★地域を越えた多様な立場の推進員の面白さ

同じ推進員という土俵で、ボランティア、当事者、社協、教員、施設職員など様々な立場の方々が、福祉教育という共通目的のもとに自発的に集い、研鑽し合い、地域での実践に活かすという現場発信型のネットワークはそうそうないと思う。福祉の世界はまだまだ縦割り、同じ所属のみが会する、業務のあて職で関係メンバーが構成される場合が少なくないのではないだろうか。

特に注目したいのが「障がい当事者の推進員」の意識である。ウェルねっとの草創期から活躍し、ご逝去された視覚障がい者の松嶋文雄さん(桶川市社協推薦)がおっしゃっていた「今まで視覚障がい者団体に所属してきたが、人前で話す際は『お涙頂戴』の話ばかりだったり、当事者の権利ばかり主張することに違和

感を感じていた。でも福祉教育に出会い『ともに生きる』発想を知り、まさに自分が求めていたのはこれだ!と確信できた。」との一言がいままでに心に残っている。現世話人の1/3近くが当事者というのもねっとの意義を物語っている。

ウェルねっとの多様性を語る上で分かりやすいのは、ねっと主催事業の後に行われてきた「飲み会」であろう。車いすユーザー、視覚障がい、聴覚障がい、発達障がい者、ボランティア、社協、教師などが同じテーブルを囲み楽しく語り合うのだが、『聴覚障がい者が視覚障がい者のトイレ介助をする』『原田先生に「そのガイド法が違うからこうしてください」とその場で当事者が教える』など、タブーはなく、地位や立場は関係ないフランクに飲み会が生きた福祉教育の場になっているのが、ねっとならではの面白さであった。

人材育成の効果・ウェルねっと継続の秘訣②

【1 活動の発展・継続（ネット世話人として）】

① 地域で（市町村社協中心）

② 県域で（ウェルネット中心）

- 一人ひとりの役割とつながり
- 市民ならではの柔軟な発想力
- 外部の評価
- 一人ひとりの変容（新たな活動を開拓）

【地域↔️県域】活動成果を双方向に生かせる！

2. 活動の発展・継続（ねっと世話人として）

私は県社協に8年勤務し、小学校教員へ転職してからは、ねっと世話人というボランティアな立場で関わらせていただいていた。人が集まるところ、栄枯盛衰がつきものである。特に、エリアが広く、頻繁に対面で活動しづらい県域ネットワークでは、活動休止する団体をいくつも見てきた。ウェルねっとは、前述の「市町村社協のバックアップ」「キーパーソンの求心力」「多様なつながり」という原動力があり22年を迎えることができたということは驚くべきことだと思う。その他の発展・継続の秘訣としては、推進員が所属する地域での活動と、ウェルねっという県域の活動がうまく循環しているからだと考えてみた。

(1) 地域で（市町村社協中心）

市町村社協が推進員と連携し実践していこうとの意欲が高まってきた。最初は県社協にやらされ感があったのは否めないと思うが、自分の地域に推進員が続々誕生してからは、市町村社協独自の取り組みや工夫も増えてきた。例えば、近隣社協と合同の研修会実施でブロックの連帯が生まれたり、社協独自に推進員のレベル向上学習会や連絡会を定期的で開催したり、学校や市民からの福祉教育依頼を受け推進員につないだりなど、社協と推進員との継続的な協同実践プラットフォームが構築されている。

(2) 県域で(ウェルねっと中心)

★一人ひとりの役割とつながり

これには公式、非公式レベルのものがある。

公式なものとしては、ウェルねっとに県内様々な団体からの講師依頼等があるが、メンバーの得意分野が分かっている適材適所に派遣していることである。これにより、自分の活動が県域ネットの実績になっているとの意識がもてるようになる。

非公式なものとしては、自分の地域で実践の手助けが必要な際は「だれかうちの地域に手伝いに来て」と援助を求めたり、自分の地域では相談しづらい実践上の悩みをメンバーに相談したりできることが、メンバーがねっとに所属するメリットと感じられることであろう。

★市民ならではの柔軟な発想力

ねっとに所属する推進員の多くが、業務の利害関係に縛られないボランティアや当事者などの立場であり、ねっとの活動として「自分の知りたい、関わりたい活動」をカタチにできるという、柔軟な発想力が生かされてきた。例えば、ねっと事業として年数回定期的に開催されてきた「まなびば、しゃべりばカフェ」では、市民が知りたいであろうコアなテーマ(婚活、LGBT、病後児ケアなど)を設定し草の根活動家や団体とコラボしてきた。まず自分たちが知りたいから発したものである。これは、社会的に啓発したいメジャーなテーマだけを扱う大きな組織では難しいことである。上から押し付けの福祉教育ではないというスタンスが継続して貫かれてきた。

★外部による評価

22年という歴史は重く、ねっとに対する社会的な信用や評価が高まってきた。県関係の各種委員の委嘱、with youさいたま(男女共同参画推進)フェスへのブース出展、県教委からの研究事業委嘱(学民協同プロジェクト)、県知事表彰(2015、埼玉教育ふれあい賞の受賞)、人事院やJR等の職員社員研修講師の依頼など、実績を積まなくては依頼されないものばかりである。対外的な評価により、自分たちのねっと活動の広がりや意味を再確認でき、自己肯定感ややりがいを感じ、ねっとや地域の推進員活動の励みになることができる。

★メンバー一人ひとりの変容

福祉教育にふれ、ウェルねっとで研鑽を積み意識を高めることを通して、自分の活動をさらに広げるなどの自己エンパワーメントにつながっている。だからメンバーの多くはねっとに継続的に関わってきたのだと思う。

私自身が福祉教育を担任としてやってみたいという小学校教員転職につながり、変容を大きく感じている一人である。代表の横田さんは、地元の坂戸市ボランティアに加え、さらに「埼玉県若者の福祉教育研究会」を立ち上げ、研究者や県内の実践者とともに若者に焦点を当てた取り組みを立ち上げた。世話人で視覚障がい者の木野さんは、地元毛呂山町周辺の視覚障がい者の自立を目指し「いどばた」という当事者団体を立ち上げたり、視覚障がい者のための音声ガイド映画の普及活動も始め、長年実践している。

3. まとめ

以上、様々な要因が関係してねっとが22年という歴史を刻むことができたと思う。最初は社協組織の人材養成システムから出発し、今は県域ねっとや地域の活動へ発展し、様々な人のつながりになっている。課題としては、ねっとメンバーの年齢が上がってきているので、若者や働き盛り世代の推進員をどう増やし、ねっとに興味を持ってもらうか、時代の変化への対応の工夫を皆で考えていきたい。

活動を振り返って

ありがとうを あなたに

副代表 木野ゆずき

出会いがくれた生きる力と喜びは 22 年前の福祉教育との出会いから始まり、様々な人とのかかわりの中で、多くの体験と学びを頂きました。

子育て中の 40 代半ば、日に日に薄れ行く目の景色に不安を抱えながらも、同じ価値観を持つ仲間を支えられ、「私の居場所がある」「こんな私でも必要としてくれる人がいる」、そう思えると自分が好きになり、自己肯定感も芽生え、生きることに勇気と自信が持てて、あったかウエルねっとはいつの間にか私のライフワークになっていました。

依頼があればどこへでも。小学低学年からは、ひととしてのありのままの姿(ともすれば、残酷な言葉が飛び交ったりもして)、ホッとする時間をもらい、高学年からは相手を理解しようとする強い力を感じ、中学生からは、困っている人のために何ができるかの真剣な取り組みに接し、高校生や一般の人からは私に欠けている沢山のことを学びました。

福祉教育にかかわるということは、自分を育てるということだとつくづく思いました。

その中で、私のハンディを基にした活動「視覚障害者と仲間の集まり・いどばた」と、見えなくても映画を見る会「声なびシネマわかば」を立ち上げ、仲間たちと楽しく、高齢者となったこの日々を楽しく有意義に過ごしています。

これも、あったかウエルねっとならなければ、福祉教育の学びの場に連れていってもらえたからと感謝するのみです。

障害があるということは、生きづらさを抱えてネガティブになりがち。でも、こちらが垣根を取り除き、ありのままにポジティブに対応すれば、周りの人も頑張りすぎずに一人の人間として対応してくれる。これが地域でともに生きるための必要条件。

この大事なことを教えてくれたのもあったかウエルねっとならなければ。そして、福祉教育でした。

「ありがとうを あなたに」、私のであえた人全員に「ありがとう」を伝えたいです。

22 年、つながってたからこそ

副代表 吉田より子&カレン

発足してから22年になるのですね。私の関わりは、約20年になるかと思います。改めて、20年もご一緒に活動させていただいていることへの感謝を思いながら、あれこれと振り返ってみました。

最初の頃の思い出と言えば、やはり、深谷南中学校での2日間の大規模体験の実施です。遠路でかけたのですが、途中の大宮駅や深谷駅のホームで、昼食のおにぎりをほおばったことを思い出しました。恥ずかしさ半分、おいしさ半分の初体験でした。

また、当事者としての話では、辛かったことを思い出しては、中学生の前で思わず涙して話が中断しかけたこともありました。

それから、毎年高等学校初任者研修にも関わらせていただいて、浦和市、深谷市、行田市にと出かけてゆきました。懐かしい思い出です。

「あったかウエルねっと」での活動を通して、数えきれないほどの人との出会いが、つながりがありました。また、原田正樹先生はじめ、多くの先生方に講師として御協力して頂きました。これは、あったかウエルねっとの財産ですね。そして、私の心の財産にもなっています。まだまだたくさんの思い出があります。どれもみな、ねっとの皆さんと力を合わせてできたこと、みなさんにつながったからこそ、と思っております。

“継続は力なり”と言いますね。私の心もだいぶ太く柔らかく、時に強くなっているように思います。

年数回、春夏秋冬の“まなびばしゃべりばカフェ”というネーミングでスタートしたゆるやかな活動では、少人数での開催も大切しております。「ふくし・福祉」を丁寧に考え楽しく実践してまいりました。

生きる喜び、生きてて良かった。みなさんにつながって良かった。という実感を、この“福祉・ふくし”を考えながら、これからも活動していけたらと願ってやみません。

会員のみなさん、そして、そのみなさんの傍にいる方々ともつながっていきましょう。

一緒に居るのがたからもの

事務局長 須田正子

第3期の推進員研修を坂戸市のボランティア仲間と受講したのは、ちょうど20年前。地域活動をし始めて2~3年経ったころです。義母の介護から卒業してちょっとだけ身軽になった私は、真夏の5日間、毎日浦和の会場まで通いました。それはそれは素晴らしい内容で、「豊かな福祉観」「福祉教育」「ふくしのまちづくり」など耳にしつつ、たくさん学んで感心することばかり。無事終了して、地元の活動に戻りました。研修で学んだことを何かに活かせればいいかなあ、と当時は漠然と思っていました。

そのまま地域の活動だけで終わっていたかもしれない私を、先輩達が誘います。写真係や会場準備のお手伝いに行くようになり、やがて世話人会にも顔を出すようになったのです。

県域の活動はたくさんのお会いとつながりと学びがありました。さまざまな立場のかたたち、他市町村のかたたちと一緒に活動することは、井の中の蛙だった私に多くの気づきを与えてくれました。見えない人とどうやって過ごせば良いんだろう、聞こえないかたにどう接すれば良いんだろう、車いすの方は困らないのかしら、というような推進員研修で学習したことが目の前で展開します。でも、打合せをしたりイベントに出向いたり、多岐にわたる活動を共にするうちに、一緒に居るだけで良いんだと気づかせてもらいました。世話人会しかり、お昼ご飯も飲み会も！障害があってもなくてもみんな同じ、普通に過ごすことが当たり前になっていきました。誰にも役割があって、互いの立場を尊重しながらものごとが進んでいくのが、あったかウエルねっと流。それぞれの得意が活かされて、刺激あって多いに学び合いました。

自分を大切に、そして自分以外の人も大切に思えるのは、一緒に笑って一緒に食べて、一緒に悩んで聞いてもらった。そんな日々が豊かにあったからだ、と、20年経った今、実感しているところです。



記念誌

あったかウエルねっと～22年のあゆみ～

発行:彩の国福祉教育・ボランティア学習推進員ネットワーク
(通称:あったかウエルねっと)

発行日:2023(令和5)年4月吉日

編集:あったかウエルねっと事務局

メール:attakawelnet@gmail.com

H P : <http://attaka2018.starfree.jp/>

